純度試験

① ピコリン　装置　100mLの枝付蒸留フラスコの枝管に、その先端が底にほとんど接するように200mLの受器を接続する。また、蒸留フラスコの口には、滴下漏斗と、下端がフラスコの底部近くにくるように送気管を取り付ける。この送気管の他端は、２個の洗気瓶に順次接続し、送気管に直結している方にはガラス繊維を、他方には硫酸を入れる。

操作法　本品約1.0ｇを0.01ｇの桁まで量り、その数値を記録し、枝付蒸留フラスコに入れ、水10mLを加えて溶かす。受器には、ホウ酸溶液（１→50）75mL及びブロムクレゾールグリーン・メチルオレンジ試液0.5mLを入れ、枝管の先端をこの溶液に浸して接続する。滴下漏斗及び送気管を取り付け、滴下漏斗から、約10分間で炭酸カリウムの飽和溶液25mLを滴加しながら、約１時間洗気瓶を通して空気を通じ、混在するピコリンを受器の溶液中に集める。次に、通気を止め、受器を新たにホウ酸溶液（１→50）75mL及びブロムクレゾールグリン・メチルオレンジ試液0.5mLを入れた別の受器に取り替えて再び30分間通気する。受器中の溶液の変色を認めれば、同様に受器を取り替えて、この操作を繰り返し、受器中の溶液の変色を認めなければ止める。全ての受器中の溶液を合わせ、0.1mol／Ｌ塩酸で滴定し、ピコリン（C_6H_7N）の量を求めるとき、その量は、1.0％以下でなければならない。この場合において、滴定の終点は、緑青色が黄緑色から黄色に変わるときとする。

0.1mol／Ｌ塩酸１mL＝9.313㎎C_6H_7N

② 塩素　本品約0.15ｇを0.001ｇの桁まで量り、その数値を記録し、水50mLを加えて溶かし、硝酸５mLを加えた後、0.1mol／Ｌ硝酸銀溶液25mLを全量ピペットを用いて加え、混和し、ニトロベンゼン３mLを加え、激しく振り混ぜた後、硫酸第二鉄アンモニウム試液２mLを加える。過量の硝酸銀を0.1mol／Ｌチオシアン酸アンモニウム溶液で滴定し、塩素（Cl）の量を求めるとき、その量は、21.5～23.5％でなければならない。

0.1mol／Ｌ硝酸銀溶液１mL＝3.545㎎Cl

乾燥減量　1.0％以下（１ｇ，減圧，100℃，３時間）

強熱残分　0.20％以下（１ｇ）

定量法　本品約0.05ｇを0.0001ｇの桁まで量り、その数値を記録し、メタノール（２→３）に溶かし、100mLの全量フラスコに入れ、更にメタノール（２→３）を標線まで加えて100mLとする。この溶液５mLを全量ピペットを用いて量り、100mLの全量フラスコに入れ、メタノール（２→３）を標線まで加えて100mLとし、試料溶液とする。別に、アンプロリウム標準品を乾燥し、その約0.05ｇを0.0001ｇの桁まで量り、その数値を記録し、メタノール（２→３）に溶かし、100mLの全量フラスコに入れ、更にメタノール（２→３）を標線まで加えて100mLとし、この溶液５mLを全量ピペットを用いて量り、100mLの全量フラスコに入れ、メタノール（２→３）を標線まで加えて100mLとし、標準液とする。試料溶液及び標準液をそれぞれ４mLずつ全量ピペットを用いて量り、試験管(1)